

「生活の社会化」論に関する一検討
 —— 富沢氏の所説をめぐって ——*

坂 脇 昭 吉

(1989年10月16日 受理)

A Study on the Theory of "Socialization of Life"

— A Comment on Prof. Tomizawa's theory —

Akiyoshi SAKAWAKI

目 次

はじめに

1. 富沢氏「生活の社会化」論の前提的問題意識
 - (1). マルクス社会理論（階級視点）批判との関連
 - (2). 社会構成体論，階級論を「基礎」にした「生活の社会化理論」
2. 「社会構造論」としての「社会的生活過程」把握
 - (1). 「社会構成体」と「生活過程」認識
 - (2). 「社会的生活過程」概念の設定について
 - (3). 「経済的生活過程」の第一義的規定性について
3. 「社会変動論」としての「生活の社会化」論
 - (1). 問題設定—「基本矛盾」から「生活の社会化」へ
 - (2). 「経済的生活過程の社会化」と「社会的生活過程の社会化」
4. 「社会変革論」としての「生活の社会化」論
 - (1). 「生活の社会化」と「貧困化」認識
 - (2). マルクス社会構成体概念に対する再度の修正

むすび

は じ め に

1986年に開催された「社会政策学会第73回研究大会」において、江口英一氏は、「勤労者世帯の実態と最低生活基準——生活費分析の方法——」と題して報告を行った。その報告をもとに江口氏は、金沢誠一氏との共作として、『変貌する産業社会と社会政策学—社会政策学会研究大会，社会

* 本論稿は、社会政策学会九州部会（1989年9月9日、於：鹿児島大学）での報告をもとに加筆，修正を加えたものである。

政策叢書第11集』(啓文社, 1987年)に論文「現代的・資本主義的『社会化』の中の勤労者生活＝家計と最低限政策」を發表している。その中で江口, 金沢両氏は, 今日言われている生活「社会化」は, 「現代的・資本主義的社会化」(同上書23ページ)のことであり, その内容からして「間接的な社会化」と「直接的な社会化」の二つの「社会化」が存在する, と次のように述べている。「第一に, ……それは, 端的に個人の諸活動の社会化である。生活活動の場面では, 商品交換, 生活財の商品化を通ずる社会生活の深化と拡大であり, ……商品化を通ずる生活の社会化である。これを間接的な社会化とよんでおく。……[もう]一つの社会化の道がある。そもそも社会ないし社会生活の存立のためには, その前提として, 社会生活存立の『一般的条件』, 生活基盤が必要である。……ひとことでいうと, ……『社会資本』といわれるものである。……その利用, 消費ははじめから, 個別的, 個人的でなく, 社会的であり共同的である。……その利用・消費にまつわる生活は, いうならば直接的に社会化された生活である。そしてそのような生活活動が, 社会の発展とともに広がることは, もう一つの意味の生活の『社会化』ということに他ならない。これを直接的に『社会化』された生活とよんでおこう」(同書24ページ)。そしてさらに両氏によると, 今日「強要ないし「強制」をとともなう消費と生活の「社会化」は, 結局のところ今日的な社会における「搾取と収奪」を意味するのであって, その「社会化」は「貧困化」をとともなうところの「社会化」である, とする(同書26ページ)。また「現代的・資本主義的に強行される『社会化』は, 生活するものの『孤立化』をうみ, 孤立した『貧困』に沈む人々を新しく形成していく可能性がある。」(同書27ページ)と述べている。

以上のような「貧困化」をとともなう「生活の社会化」に対して両氏は, 実は逆の方向からの「社会化」も生じるとして次のように述べている。「商品化を通ずる生活『社会化』という間接的な道に対してそれを直接的な生活『社会化』の過程に切りかえ, 編成替えする方向であり, 場合によって『下からの』社会化といわれる道である。すなわち個々人の商品的消費生活を『社会化』=『共同化』していく道であり, 代表的には社会保障その他近代的な生活保障制度である。……それは具体的には労働と生活の最低限保障とくに最低限の生活費の保障の不可欠性をさし示している」(同書27～28ページ)。

こうした江口, 金沢両氏の実証的分析を踏えた「生活の社会化」の概念規定なり, 「生活の社会化」論の問題設定に対して, 富沢賢治氏は, 前掲の『社会政策学会研究大会叢書第11集』において, 江口氏報告のコメント^{注(1)}として次のように述べている。「江口氏と同様に私も, 今日の国民生活の分析にとって『生活の社会化』がキー概念になりうると考えている。しかしながら, 川口清史氏も述べているように, 『生活の社会化』という概念は最近比較的よく使われるが, それとして十分に定義され, 共通の理解のあるものにはなっていない」。したがって, 『生活の社会化』を社会科学上の概念として明確にすることは, 今日の重要な理論的課題である。……江口氏は, 生活の社会化→家計の硬直化→生活の貧困化, という筋道で, 『社会化=貧困化』として理解されているようにもとれるのであるが, その先の問題として, 『貧困』克服の方向を『社会化』との関連でどう理解

したらよいのか。この問題を解明する必要がある」（同書67ページ）。このように富沢氏は、江口氏らの勤労者家計分析を一定評価しつつも、「生活の社会化」に対する規定については必ずしも同意することなく、「生活の社会化」に関して独自の考えを主張する。そこで富沢氏は、前掲書『研究大会叢書』に掲載されている坂口正之氏の論文にふれた中で、以下のように自らの「生活の社会化」論の構想を示している。「私もまた、今日の社会政策学の課題を明らかにするためには、『生活の社会化』の視点からする、国民生活の構造と変化、および主体形成の問題の解明が必要だと考え、社会構成体論、階級論を基礎にして一国の現実社会の総体を日常生活の全面にわたって解明しうるような社会理論を、『生活の社会化』の理論として構築しようと試みている」（同書68ページ）。

そこで富沢氏の言う「生活の社会化」の理論とはいかなるものであるのか、氏が詳細に展開しているという同氏編著『労働と生活』（世界書院、1987年）の中の同氏担当執筆部分に即して、氏の「生活の社会化」論について若干の検討を行おうと思うのである。特に江口氏に対する「コメント」の後に書かれている、富沢氏の「社会構造論」の要約の中に示されている「社会的領域」の設定とその内容がいかなるものであるのか、マルクスの社会構成体論との関係はいかなるものであるのか、一定の検討を要する問題であると同時に、一定の看過しえない問題を含んでいると考えられるので、以下富沢氏の「生活の社会化」論について検討を行うことにする。

注(1) 富沢氏のコメントは、「社会政策学における『社会』の意味—江口報告と大陽寺報告に関連して—」という論文の形をとっており、その内容は以下の6点から成っている。1. 問題の所在、2. 江口報告へのコメント、3. 社会理論としての「生活の社会化」論、4. 狭義の社会政策 (Sozialpolitik) と広義の社会政策 (Gesellschaftspolitik)、5. 「総合社会政策」の問題点、6. 社会政策学における「社会」の意味。

1. 富沢氏「生活の社会化」論の前提的問題意識

(1). マルクス社会理論（階級視点）批判との関連

富沢氏はまず、第1章「生活の社会化」論の冒頭において、「20世紀も終りに近づいた今日、マルクス主義は、その有効性の再検討をすどく迫られている。」（前掲『労働と生活』5ページ）としたのち、「マルクスの社会理論を批判する多くの論者に共通する論点は、階級という観点から社会の構造と動態を把握し、そのような立場から社会の変革を企図することは、現代においてはもはや有効な理論とはいえない、とする主張であ」（同書6ページ）り、その論拠を整理すると次の2点であるとする。「第一は、そもそも階級概念をもって現実を把握しうるのか、という問題である。より一般的なかたちに言いかえるならば、概念と現実との関連にかんするマルクスの方法の問題である。……第二は、『変革主体＝労働者階級』という階級論的な変革主体認識の現代における有効性の問題である。これはまた、マルクスの階級論をもって『市民』や『人民』を把握しうるのか、といった問題でもある」（同書6～7ページ）。そして氏は、黒人運動や女性解放運動、そして消費者運動や環境保護運動などの「市民運動」の論拠は階級理論からはみ出しているとする北沢洋子氏

等の主張を紹介している (同書7ページ)。

富沢氏は、そうした批判に一定の同調を示しつつも、「『社会構成体』概念や『階級』概念の媒介なしになされる『労働者の存在』そのものの分析は、結局は理論的な混迷におちいらざるをえない。」(同書12ページ)として、そうした論者に対して一応批判的立場をとる。しかしながら氏は、続けて次のようにも述べるのである。「社会構成体論あるいは階級論のたんなる演繹的な適用によっては、『労働者の結合や結集や組織化』の現実の問題は把握されえない。」(同上)のであって、例えば「現代の資本主義諸国が資本主義的生産様式・生産関係という『同じ経済的土台』に基礎づけられているからといって、現実の各国社会の分析がそこでとどまってはならない」(同書13ページ)。

マルクス主義的な立場から労働者状態分析や、労働問題を研究する者は、当然マルクスの社会構成体概念や、階級的視点を単に「演繹的に適用」すればよいなどとは考えていないし、マルクス主義の立場から一国社会分析を試みている研究者も数多く存在している。問題はマルクスの社会構成体概念や、階級的視点を修正し、放棄してしまうのか、それとも、マルクスのそれらを基本的に認め、踏えた上で、現実の労働者状態や国民生活の諸矛盾の分析を行い、社会変革の展望を明らかにするのかであろう。

富沢氏の問題意識は、これまでのマルクス社会構成体概念なり階級的視点に対する種々の批判に対しては一応、マルクスのそれらを踏えることを主張しながらも、それだけでは労働者分析や、各国の社会分析はできない、という点に重点を置いた主張をしている。それでは、そうした氏が強調する現実の社会分析の方法として構築しようとするものは、マルクスの原則的な方法や内容との関係においてどのような対応と処理を行っているのだろうか、そうした点を念頭に置いて以下氏の論旨を検討しよう。

(2). 社会構成体論、階級論を「基礎」にした「生活の社会化理論」

そこで富沢氏は、「階級闘争の理論が要請する現実社会分析は、……ある一国の現実社会の全体を日常生活のすべての側面にわたって解明するものでなければならない。」(同書14~15ページ)とし、「すべての側面にわたって解明しうるような理論的枠組み」(同書15ページ)こそが「生活の社会化」の理論である、とする(同上)。そしてその理論的枠組みは、「①ある一国の現実社会の総体を、その社会の構成員の生活の総体として把握し、その生活の相互関係の構造を明らかにすること(社会構造論)、②その生活構造の変動の基本的要因を生活の社会化として把握することによって、社会変動の法則性を明らかにすること(社会変動論)、③このようにして明らかにされた社会構造と社会変動の客観的法則を基礎にして、社会変革のみちすじを解明すること(社会変革論)、である。」(同上)と述べている。しかしながらここで直ちに疑問になるのは、第1に、はたして「階級闘争の理論が要請する現実分析」が何故「現実社会の全体を」、しかも「日常生活のすべての側面にわたって解明」しなければならないだろうか、という点である。階級闘争という限りにおいては

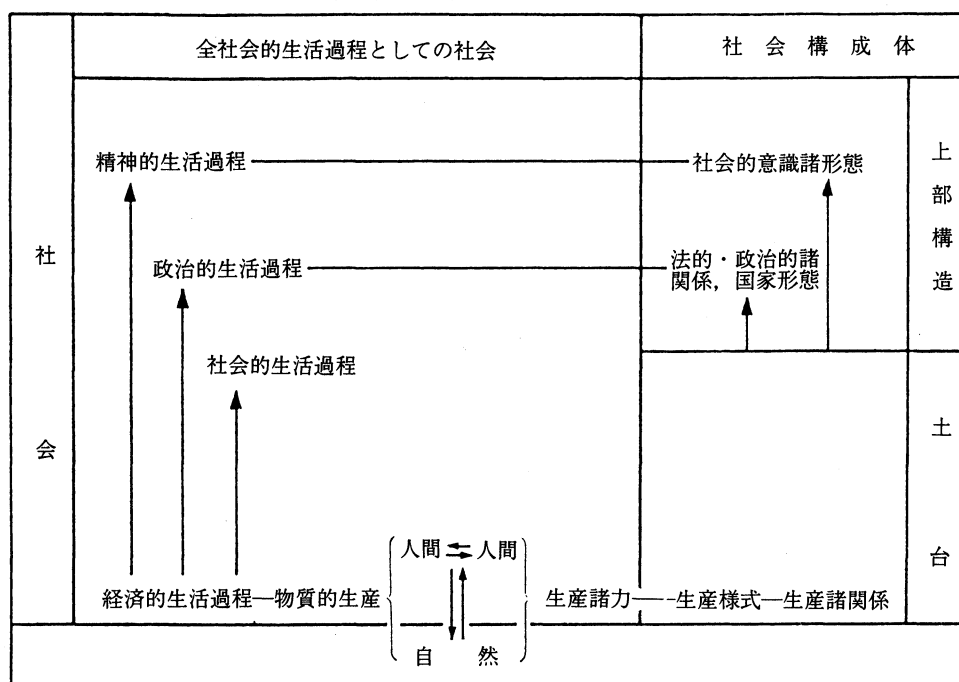
なるほど、それは社会の全領域を視野に入れ、そこへの影響と作用を分析し、階級闘争の成熟と社会的拮据を確証しておくことは、情勢判断を的確に行うという政治的意味は大きいけれども、階級闘争自体は、基本的には労働者、勤労者階級が、その経済的活動（経済的生活と言いかえてもよい）の中で、自らの労働条件や、生活状態の改善のために基本的な対立関係にある企業や資本（家）と避けることのできない闘いを行い、その社会的実現と、労働者、勤労者階級の真の解放のために行う経済闘争、政治闘争、理論闘争を言うのである。そうした闘いの現状や、深まりの状態をこそ十分に分析することが直接的には必要なのである。そして経済的活動とその生活こそが社会の基礎をなしており、他の社会的領域は、経済的諸関係と諸状態に基本的には規定されているのである。次に第2の疑問として、氏が「生活の社会化」理論の基本的枠組みの①にあげている「社会構造論」は、自らも明記しているように「現実社会の総体を、その社会の構成員の生活の総体として把握し、その生活の相互関係の構造を明らかにしようとする」（傍点筆者）のであるから、「社会構造論」ではなく、「生活構造論」ではないだろうか。次の②においても氏は、「生活構造の変動の基本的要因を」（傍点筆者）と言っているのだから当然①は「生活構造論」とすべきであろう。なお付言すれば、「社会」という概念自体は決して「生活」そのものでもないし、「生活」にとってかわることのできる概念でもない。「社会」とは確かに「生活」という実態をともなったものであるが、実態そのものではなく、一種の「関係」概念である。言うならば、人間が生きるにあたって営む諸生活を客観的実在とし、その諸生活を営むにあたってとり結ぶ関係の総体が社会である。

2. 「社会構造論」としての「社会的生活過程」把握

(1). 「社会構成体」と「生活過程」認識

そこで次に富沢氏は、第2章「社会構造論」において、まず自らの「社会構造論」としての「社会的生活過程」把握のために、独自の「生活過程」論を展開するにあたっての前提として、マルクスの『経済学批判』「序言」の中でのいわゆる史的唯物論の「公式」^{注(1)}に対して次のように疑問を提起する。すなわち、「公式」は前半が社会構成体の構造を説明し、後半は生活過程を説明している、としたあと、後半の「社会的生活過程」は何を意味しているのか、とその意味を問う（同書21ページ）。そして自らの考えとして、「社会構成体」と「生活過程」との基本的関係について次のように規定する。「社会構成体という概念は、社会の基本的な構造とその変動のシステムを明らかにするために、人間の現実的な生活過程の実体的な諸契機を、生産様式・生産関係が社会の土台をなすという観点から、理論的に抽象化・構造化してとらえかえたものとして理解される。……人間社会は、……①諸個人の現実的な生活過程の総体としての社会と、②それを土台・上部構造として構造的に再把握した社会構成体、という二つの位相にわけて考察することが可能となる」（同書22ページ）。そして下図のような「生活過程と社会構成体」なる図を示している。そして氏は、マルクスが先の「公式」の中で示した「社会的生活過程」は、第1図に示されているように、狭義の

第1図 生活過程と社会構成体



(同書22ページより)

「社会的生活過程」のことであって、「全社会的な生活過程」とは異なるものであるとの前提のもとに、「全社会的な生活過程」は経済的、社会的、政治的、精神的生活過程の4つの側面から成り、その内容は次のようなものであると説明する。「①経済的生活過程は、物質的富の生産、分配、交換、消費の過程から成る。……②社会的生活過程で問題とされるのは、全体社会あるいは社会総体ではなく、血縁関係と地縁関係からはじまる種々の人間関係(……)、あるいは主として人間の再生産(……)と人間の社会化(……)に関連する小社会集団といった、全体社会の内部に存在する部分社会に関する生活過程である。……社会的生活過程のもっとも基本的な問題は人間の生産だといえる。……③政治的生活過程で問題とされるのは、諸個人、諸集団の政治的関連である。……④精神的生活過程は諸個人、諸集団の精神的な生産—コミュニケーション—享受の過程であり、ここで問題とされるのは諸個人、諸集団の精神的関連である」(同書23~24ページ)。

以上のように富沢氏は、マルクスの社会構成体概念とは別に「全社会的な生活過程としての社会」なるものを設定し、「生活過程」の側面から社会を捉え直しているのだが、その場合氏は、図1でも示されているように両者は平行なものとして設定されている。ところが氏が「全社会的な生活過程」の内部に設定している「経済的生活過程」についてみれば、はたして社会構成体概念の内部にそれに対応するものが存在するのだろうか疑問な点である。すなわち、いわゆるマルクスの史的唯物論の「公式」の中では「社会の経済構造」(土台)となっており、これは社会構成体の内部に入るのことで、この点は氏も確認している(同書21ページ)。しかも「経済的生活過程」なる言葉は「公式」にはない。事実氏も、「公式」の言う『物質的生活の生産様式』は社会構成体の『土

